



福島成蹊中高一貫

# 学校通信

令和元年 11月5日

令和元年度

第 8 号

## 物事の長短

校長 本田 哲朗

福島の今は一年で最も艶やかな時を迎えている。それと合わせ収穫も一段落を終えホッと一息をする所だろう。ところが、予想を上回る台風の水害の為に、恐らくそれどころではない人も多いのではないだろうか。紙面ではありますが、被害にあった方々にはここからお見舞いを申し上げます。

さて、夜が伸びると、それにつられ本を手にする時間も伸びてくる。併せて音楽にさく時間も。共通するのは比較的長めで、ボリュームのある対象が多くなる事だ。例えば音楽ならクラシックの曲を、ポピュラーなら一人のミュージシャンのアルバムを聴く機会が…。

とは言え、どちらにも長短はあるもので、例えばシューマンの“トロイメライ”は概ね2分30秒に対し、ベートーヴェンの“第九「合唱」”では、約72分と優に一時間を超える。いずれの曲も作曲家の世界を表現しているのだが、子供の世界のファンタジーや、大家の人生を感じるのに必要な時間だと思う。しかし、ベートーヴェンの生涯を感じるには一時間超でも足りないもので、楽聖は創造した九つの交響曲の十倍にも匹敵する波乱万丈な人生を送った。

話題を変えたい。書物と言っても高々私の読書歴の枠組みなので、勿論一般論ではない。まず、最も短いモノに俳句がある。中でも俳聖の句は当地を含む東北各地に散在しており、主なものだけでも中々味わい深い。和歌は国語で教わったモノが主で、次いで多いのが“百人一首”と言うのが正直なところである。小説は色々だが、読み応えが実感出来る書物で初めて手にしたのは、吉川英二著の“三国志”だった。その後、司馬遼太郎先生の作品を好むに及び、随分と読んだ。司馬先生の著書は、比較的ボリュームのある作品が多く、一つひとつ挙げる事は控えたい。これとは別に“詩”の世界があるが、そこには果ての無い深遠さを感じてしまう。自分の「好き」と言う感覚を超越して正直なところ私には全く手に負えない。

ところで、長・短の別なく、これ等の作品(音楽・著書)は、創作家(作曲家・作家・詩人)が必要にして十分を吟味し、創りあげたモノだ。だから、我流にしても心して掛からないと、納得の行く所までは辿り着けない。

私は先ず時間の覚悟を決める。例えば…長い小説なら二、三か月に及ぶこともある。ベートーヴェンの34曲中の一つピアノソナタなら大体20分から30分位で、ショパンのワルツであれば数分と言う風に。また、現代音楽(ポピュラー)のアルバムなら、精々40分+αと言った所だ。しかし、聞き流す…目を通すと異なり、聴き入る…、読みこなす…となると、精神の集中度のレベルが断然違ってくる。更に、気持ちの移入ともなると、事の前後にウォーミングアップが必要な時もある。反面、短いモノ(作品)では一気に集中し5分に及ばない事もザラだ。翻って、この事を考えると、実は自分の勉強にも当てはまる事に気づく。現在、例え趣味の世界に没頭する時、過去の学習法にも似たHow toを実践している事が多いのだ。尽き詰まるところ、何かを得ようとして行動を起こす時、一人の人間のザマと言うか、対象が何であれ具体的行動として、どうしてもある種の統一感が常に付きまとう気がする。

